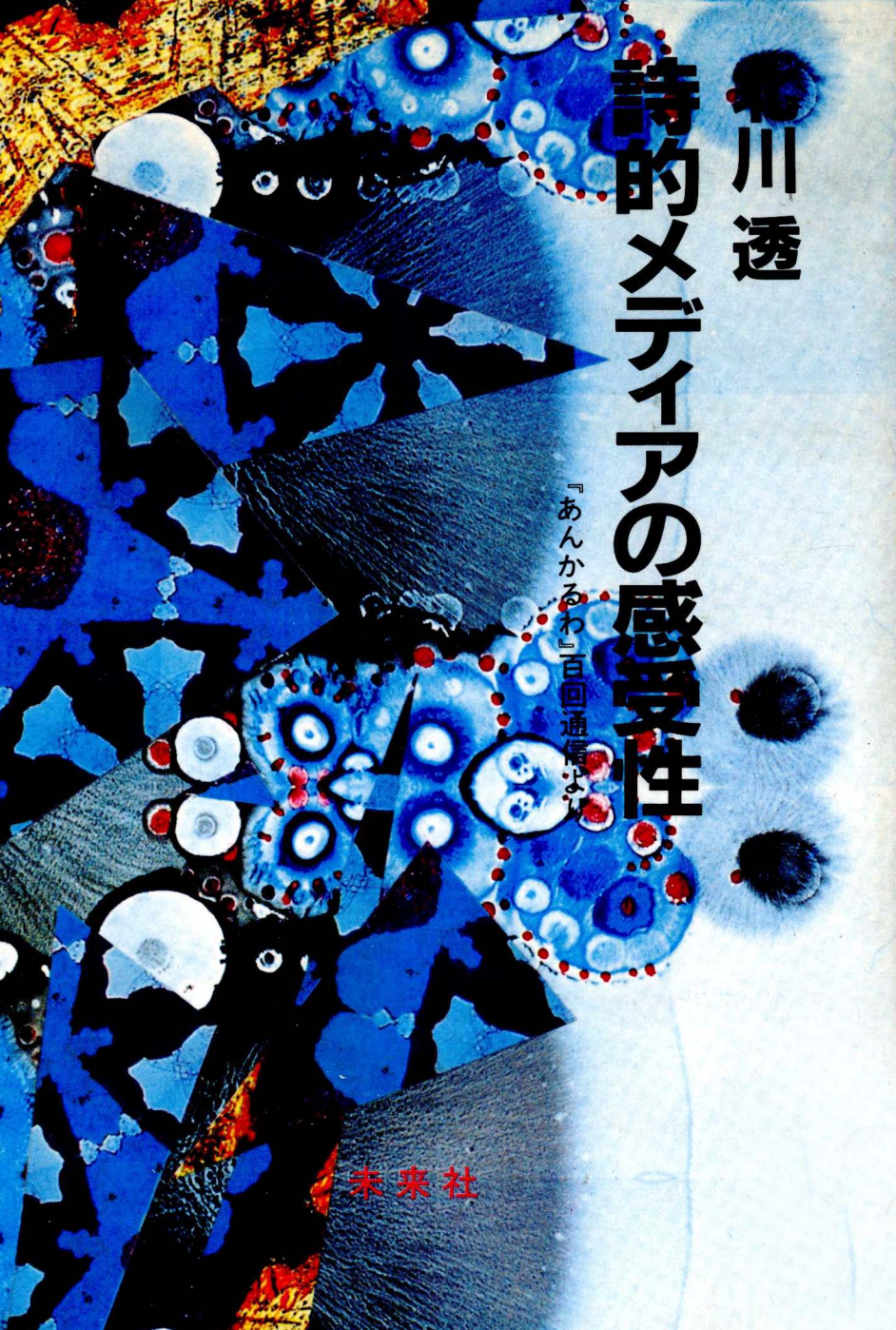

詩的メディアの感受性

『あんかるわ』百回通信より

川透

未来社

的メディアの感受性

『あんかるわ』百回通信より

北川透

未来社

北川　透（きたがわ・とおる）

1935年愛知県生まれ。愛知学芸大学国語科卒。
・詩集　現代詩文庫『北川透詩集』『遙かなる雨季』『情死以後』『魔女的機械』『死亡遊戯』　その他。
・著書　『北村透谷■試論』全三巻　近代日本詩人選15『中野重治』『詩神と宿命――小林秀雄論』『荒地論』『現代詩前線』　その他。
・詩と批評誌『あんかるわ』編集・発行　詩誌『菊屋』同人。

詩的メディアの感受性
――『あんかるわ』百回通信

発行――一九八五年五月二〇日　第一刷発行
定価――一九〇〇円

著者©――北川　透
発行者――西谷能雄
発行所――株式会社　未来社
東京都文京区小石川三―七
振替（東京）七―八七三八五
電話・(03)―814―5521～4

本文印刷――第一印刷
装本印刷――形成社
装幀――浅倉　汀
製本――今泉誠文社

詩的メディアの感受性

『あんかるわ』百回通信より

目次

I わが執着われら難破船
——『あんかるわ』の二十二年
1 幾つかの前提 又は 創刊の頃 9
2 同人誌のおもしろい時代 16
3 大いなる裂け目への予感 24
4 大学闘争との交差 32
5 共同表現論とその座礁 39
6 〈中絶〉以後 46
7 詩的メディアの感受性 53
II 百回通信（一九七五～一九八四）より
月村敏行への手紙1・2・3 65
村上一郎さんを悼む 87

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

あるプリズム　94
1・小さな死者についての報告　2・或る Prism 又は Prison
毛沢東の死　99
〈研究者の文体〉とは？　106
彼岸の鳥　113
1・立中潤の死　2・鳥羽行き　3・遺書
4・純白のスクリーン　5・或る挽歌
古賀忠昭作品「エッタ」をめぐる問題　152
政治的知識人の中間性をめぐって　160
黒田喜夫・清水昶論争をめぐって　169
ピエロという名の当事者　180
〈戦後を疑う〉を疑う　189
黒田喜夫「詩と権力」批判　198
村瀬学『初期心的現象の世界』についてのノート　204
家族の現在――芹沢俊介『家族の現象論』について　211
出版の危機の根にあるもの　219

論戦余滴——詩人会議のイリュージョン　227
内面の壊滅した風景——永田洋子『十六の墓標』について　235
現代詩は、いま、何処に……　251
戦後民主主義の鏡——田中角栄とは何か　260
『あんかるわ』の行方——解体と再生　272
あとがき　282

詩的メディアの感受性

『あんかるわ』百回通信より

I

わが執着われら難破船

――『あんかるわ』の二十二年

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

1　幾つかの前提　又は　創刊の頃

手渡しの延長のような、小さなメディアへの執着が、なぜ、生まれるのか。なぜ、ことさらディス・コミュニケーションの細い回路を通ろうとするのか。そして、わたしたちは、なぜ、あえて安全運航を避け、難破遊行を繰り返さざるをえなかったのか。そのなぜに、いま、きっちりとした答を出すことはむずかしい。わたしたちの試みは、まだ、終っていないのだから。従って、このささやかな散策は、終りなき難破船の旅を、さらに波乱にみちたものとするための、とりあえずの検証、とりあえずの総括、そして、とりあえずの中間報告のつもりである。あるいは、それを媒介にした同時代へのスケッチであり、私的なメディア考である。

わが難破船、それは詩と思想をめぐる表現誌『あんかるわ』のことだ。これが同人誌の形態で創刊されたのは、安保闘争敗北後、いよいよ情況が冷え込んできた一九六二年八月のことである。発行所は、愛知県豊橋市のわたしの住所とし、創刊の同人はまだ、愛知大学を卒業したばかりの浮海啓と二人であった。二号からは瀬川司郎（山本英夫）が参加し、それ以後、岡田啓、吉岡学、別所興一などが同人になった。それから四年後の六六年四月に14号を出して、あんかるわ同人会は解散したが、一年余の休刊を経て、六七年六月には15号として復刊した。北川透の個人編集・発行になったこの号か

らは、読者も全国に広がりはじめ、そのなかから寄稿者が次々に誕生した。今年（一九八四年）の八月には、創刊以来二十二年が経過し、それまでに70号が出るはずである。この二十二年にも、70号にもそれ自体には何の意味もない。もっと長寿で活発な同人雑誌はいくらでもあるからである。問題は、わたしたちが、この貧しいメディアを媒介にして、何を産みだしてきたか、そして、いま、何を産みだしつつあるのか、ということにかかわっている。そして、本来的に、作品や表現は発表誌などというものを記憶していないし、忘れさられるのが自然だ。

わたし自身は、非商業誌とか、自主的な小メディアというものへの過剰な思いこみを、これまで一貫して排してきたつもりである。それを根拠にすることは、ひとつの思想的な態度とか、生き方の問題であっても、それ自体、なんらすぐれた作品や表現を保証するものではない。むしろ、読者をせまく限定することの甘さが、貧しさに帰結することが多いとさえ考えている。その雑誌がつくり出す、読者の信頼や親和性をあてこみ、そこでしか通用しないレベルや私語に慣れはじめたら、もうどうしようもない。しかも、自主的・自立的出版物をめぐる経済的困難や、それによって生ずるさまざまな犠牲が、外側からも内側からも、それらの持続に対する思いこみを、いっそう過剰にしてしまう。自分たちの表現の甘さや、思想的な弱さ、情況へのたち遅れを棚にあげておいて、雑誌が売れないのは読者が悪い、あるいは非商業誌をめぐる環境が悪いと、他へ問題を転化してしまいやすい。そして、ますます独善に走り、結局は放りださざるをえなくなる。

わたしはよそごととしてこれを述べているのではない。こうした過剰な思いこみを排してきたつもりでも、それに包囲され、みずからもそこに巻きこまれてきた、というのもたしかだからである。わ

たしに限っていえば、すくなくとも十五年ぐらい前からは、作品や評論を発表するに際して、『あんかるわ』がなくても別に不自由しなかったわけだから、そのためだけなら、この雑誌は、とっくに終ってよかった。いや、不自由しなかったどころか、これあるがために時間的・経済的な欠損をかかえこむのだから、ライターを職業としている論理から言えば、やめるべきだとすら言える。しかし、わたしは、これまでもこの雑誌を放棄する気にはまったくなれなかったし、今後もそうだろう。また、最初の問いにかえれば、この執着はなぜなのか、ということである。

その問いからは、もっとも遠く、しかも、いちばん気に入っている答は、編集したり、雑誌をみずから作ったり、それを読者に渡していくときの手応えをじかに感じたり、地方の小さな印刷屋さんで働いている人たちの厚意に触れていたり……そういうことが好きなのだという説明である。実際二十二年も雑誌をつくっていると、その製作過程は生活の一部になってしまうし、印刷屋さんとは親戚づきあいのような交際が生まれてしまう。こんな小さな雑誌でも、それが持続するについては、実に沢山の経済の論理を越えた協力がある。そして、それらのすべてが、雑誌への情熱や執着を底で支えるのである。

この感情にいつわりはない。また、そういう風に考えるのがわたしは好きだ。しかし、その執着の根本を説明することばとしては、どこかはずれている。わたしの執着は、どうやら、この雑誌が、通常の意味での同人雑誌でも詩誌でもないことにかかわっているのではないか。つまり、わたしたちは『あんかるわ』を、詩や思想表現をめぐる自立的なメディアとして、これまで定立させようとしてきた。自立的という意味は、ひとつは読者の購読費だけで雑誌を刊行する経済的な自立の意味である。

復刊15号からの『あんかるわ』は、スポンサー、広告、その他だれからの援助も受けないで、曲がりなりにも、独力で刊行してきた。自立的というもう一つの意味は、思想的、政治的、あるいは文学方法的党派性を排する、ということである。これについても、会員制、同人制をとらず、読者はだれでも寄稿しうるし、自分の生涯のテーマ、もっとも本質的なテーマを、自由に展開できる場としてきた。この自立的メディアを創りだし、それを持続するということに、わたしの執着のすくなくともある部分は、かけられたのだと思う。その余の部分については、わたしにもわからない。

そうだとして、一部で流布されている自立誌ということばを、いまは『あんかるわ』に使いたくない。なぜなら、わたしたちにとって、この二つの指標は、これまでも、いまも実に危ういからである。たしかに復刊後の十八年間は、なんとか経済的な自立性を維持してきている。しかし、それは印刷屋さんの厚意にすがったり、頁数を減らしたり、定価をそれに見合うだけ値上げしたり、というやりくりの上での自立なのである。さいわいにも船が小さいので、暗礁に乗りあげても、みんなで持ちあげたり、応急修理をしたりして航海できたわけだ。その意味では、思想の遊撃戦において、船が小さいこと、手工業的であることは、とてもいいことだ。難破もまた楽しんでいられる。

思想的自立性ということになると、もっと危うい。それを標榜すること自体が、一つの党派性、宗派性と見なされることに危うさがあるのではない。つねに情況的であること、そして、同時に、長い時間の射程に耐えうる文学・思想表現の実質を形成する主体、その運動の場でありつづけることを抜きにして、自立しています、などとアドバルーンをあげることになんの意味もないだろう。決意やら方向性やら立場やらとしてだけなら、どんなことでも言える、実際に、『あんかるわ』を媒介にして、

情況的であると同時に、普遍的である課題が、それぞれの表現の自己運動において、果たされる必要がある。わたしたちはガンバッテイルが、それらは自立のことばに値しないという批判も、甘受しなければならぬだろう。

かつて、主として攻撃対象として、自立三誌という呼ばれ方をしたことがあった。三誌とは、吉本隆明の『試行』、村上一郎・桶谷秀昭の『無名鬼』、そして、『あんかるわ』である。その攻撃内容には腹が立ったが、『あんかるわ』が自立誌と呼ばれることには、恥ずかしさもあったのである。わたしは、もし自立誌という概念が成り立つなら、『試行』一誌でよいのではないか、と思っている。『無名鬼』は、村上一郎の個性を強く反映して、独得の自立の軌道を描こうとしたが、志なかばにして倒れた。わが『あんかるわ』は、編集・発行者の非力といいかげんさが群を抜いているので、自立は課題ではあるが、おそらくは永久に、他立に助けられた難破船といったところであろう。常にSOSを発している。

そもそも出発点からして、『あんかるわ』は、『試行』や『無名鬼』とは、性格もレベルもちがっていた。『試行』は、一九六一年九月、つまり、『あんかるわ』に一年先だって創刊されている。編集同人谷川雁・村上一郎・吉本隆明は、すでに当時、文学者としても、思想家としても、十分な力量を蓄積し、ジャーナリズムの上でも大きな影響力をもっていた。この三人の間に、微妙な差はあったとしても、彼らが『試行』誌上に展開しようとした思想的な構想は明らかであった。『無名鬼』は『試行』から離れた村上一郎が、一九六四年十月に独力で創刊した。後に、桶谷秀昭との共同編集となるが、これらの雑誌は、はじめからすでに自立した文学者の営みとしてあったと言ってよい。そして、その

すべてが、わたしたちに欠けているものだった。

その意味では、『あんかるわ』は、一九六〇年代のはじめに若い二十代の詩人たちによって、次から次へと創刊された尖鋭な詩誌に、むしろ、近かったと言ってよい。天沢退二郎、渡辺武信、菅谷規矩雄らの『暴走』(一九六〇年八月)、それと共通するメンバーの『バッテン』(一九六一年六月)は、当時のもっともラジカルな情況意識と詩意識をもっていた若い詩人たちの同人詩誌だったが、やがて彼らは六〇年代の詩を主導した『凶区』(一九六四年四月)に結集してゆく。同じ二十歳代の若い詩誌で、時代情況を尖鋭に映していたものを他にあげれば、岡田隆彦、井上輝夫、吉増剛造らの『ドラムカン』(一九六二年七月)、望月昶孝、安宅夏夫、郷原宏らの『長帽子』(一九六三年五月)、八木忠栄、岡庭昇、中上哲夫らの『ぎゃあ』(一九六三年七月)などがある。出発時における『あんかるわ』は、これらの世代的な貌をもった詩誌の一つに過ぎず、しかも、そのどれよりも力がなかった。そこにはわたしたちの雑誌が、東三河の豊橋というせまい地域性と、思想的な交通関係の貧しさのなかで成立したということがあるだろう。世代的には同じでも、すでに天沢退二郎も、鈴木志郎康も、長田弘も、岡田隆彦も、わたしたちの眼からみれば、若手のスター詩人だったのである。

安保闘争後の世代的な気分や感覚性において、『あんかるわ』は、これらの詩誌と共通するものを多く持ちながら、しかし、どことなく異なっていた。それはわたしたちが、詩誌という限定を嫌ったということだけではない。もう少し雑誌の根本にかかわっていたのは、創刊号の浮海啓による後記の文章にも映しだされているだろう。

《悪戦苦闘のすえといってよかった。最初の号は、一九六〇年安保闘争以後の思想状況に、地方的に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook